

スポーツ実技(水難救助)		実習	准教授 古川 慎太郎 助 教 水上 治彦
科目カテゴリー	救急救命士コースの教養選択科目	科目ナンバリング	13220110

1. 授業のねらい・概要

水難事故の危険性を正しく理解し、特に、静水域（プール）における危険予測、自己防衛法（セルフレスキュー）、救助方法（バイスタンダーレスキュー）を理解・習得し、他機関との連携要領を理解する。初歩的な安全管理知識・技術、救助知識・技術の修得を図る。

2. 授業の進め方

各種泳法の修得、各種救助法の修得、各種処置要領の修得のための座学を行い、プール環境にて実技を行う。

3. 授業計画

1. 水難事故総論 水難救助実習の目的、水難事故概要、件数、要因、バディシステムについて 2. 水難事故におけるチェーンオブサバイバル 予防、早期通報、救助、一次救命処置、二次救命処置 3. 公的機関による水難救助について クロール・平泳ぎについて 4. 基本泳法 背泳ぎ、エレメンタリーバックストロークについて 5. セルフレスキュー サバイバルフローティング、背浮きについて 6. セルフレスキュー スカーリング、立ち泳ぎについて 7. 着衣泳法・PFD 着脱要領 8. バイスタンダーレスキュー レベル1 要領について、リーチングアシスト、スローイングアシスト	9. バイスタンダーレスキュー レベル2 要領について、入水法、水中歩行 10. 水中での頸椎保護 スパイナルケア：EAR、バイスグリップ 11. 陸上及び水中での頸椎保護 受傷機転の確認、全身固定 12. 搬送要領 1人法による搬送、複数人による搬送方法 13. 基本泳法実技試験 各種目 50m 完泳(クロール、背泳ぎ、平泳ぎ、エレメンタリーバックストローク) 14. セルフレスキュー セルフレスキュー(サバイバルフローティング、背浮き、スカーリング、立ち泳ぎ)5分間 実技試験 15. 総合想定訓練・筆記試験 第1回～15回の総復習をシミュレーション演習でまとめる
--	---

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

適宜提示する事項に関する事前学習、授業内容の振り返り、資料整理、自主練習等を行う必要があり、各授業につき30分～90分程度を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

口頭や資料提示等により、個別または授業中の講義を通じて行う。

6. 授業における学修の到達目標

- 1) 水難救助活動における安全管理の重要性について理解を深める。
- 2) 静水域（プール）での救助活動を行う上で、必要となる基礎知識・技術を身に付ける。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（50%）および授業で実施する試験・想定訓練における活動状況（50%）により評価する。
なお、平常点は、授業態度・積極性・協調性・判断力・行動力等を踏まえて総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

改訂第 11 版 救急救命士標準テキスト(へるす出版)

水上安全法教本(日本赤十字社)

適宜指定する資料

9. 受講上の留意事項

- 1) 安全管理の徹底を要する実技項目があるため、教員の指示に従って統率の取れた行動がとれる学生のみが受講すること。
- 2) 以下に該当する場合は、当日授業を欠席扱いとする。
 - a) 実習に相応しい身だしなみ(アイロンがけした制服、黒色または紺色の T シャツ、黒色または紺色の靴下、汚れていない内履、及び名札の着用)が履行できない場合。
 - b) 長い爪、髭、過度に明るく染色した頭髮、アクセサリーの着用等、社会通念上医療従事者として活動に従事する上で、相応しくないと認められる場合。
 - c) 使用するテキストや資料、個人資器材、その他授業に持参するよう指示した物品を忘れた場合。
 - d) スマートフォンなど音の出る電子機器については、電源を切ることを原則とし、これに従わない場合。
 - e) 居眠りや落ち着きのない言動等、授業の円滑な進行を妨げると教員が判断した場合。
 - f) 授業開始 10 分前までに事前連絡がない遅刻、及び 30 分以上の遅刻。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。本授業は、公的機関における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。